

科学研究費助成事業（若手研究（S））研究進捗評価

課題番号	20678002	研究期間	平成20年度～平成24年度
研究課題名	受精後ゲノム刷り込みはいかにして確立するのか？	研究代表者 (所属・職)	谷本 啓司（筑波大学・大学院生命環境科学研究科・准教授）

【平成23年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
○ A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(意見等)</p> <p>「DNAメチル化によるゲノム刷り込みは、受精後に起こる」という独自の発見をもとに提案された研究であるが、当初計画の大部分を解明するに至っている。また、研究はDNAメチル化以外のエピジェネティック機構解明にも進んでおり、期待以上に進展している。すなわち生殖細胞形成過程での特異的なDNAメチル化修飾と受精後の体細胞でのメチル化がそれぞれ独立した機構をもつという、新たな基本的概念を確立しつつあり、高く評価できる。また研究成果を専門分野の一流誌に発表している。さらに投稿準備中の論文も一流誌に掲載されるものと推察できる。</p>	

【平成25年度 検証結果】

検証結果	<p>本研究は哺乳類に特有のゲノムの刷り込み機構について、H19-ICRを対象としてそのエピゲノム情報の実体とゲノム上の <i>cis</i> 配列を明らかにすることを目的としたものである。父方アリの DNAメチル化に必要な <i>cis</i> 配列の同定には至っていないが、H19-ICRの精子における DNAメチル化、CTCF、small RNA がいずれもエピゲノム情報ではないなど、ネガティブではあるが重要な知見が得られている。したがって、研究進捗評価結果と比べ必ずしも期待した成果が上がったとは言えないが、ほぼ当初の予定どおり研究が進展したと評価できる。</p>
A	